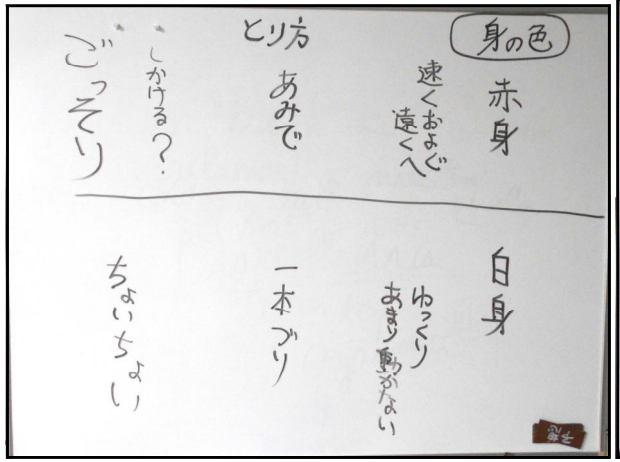
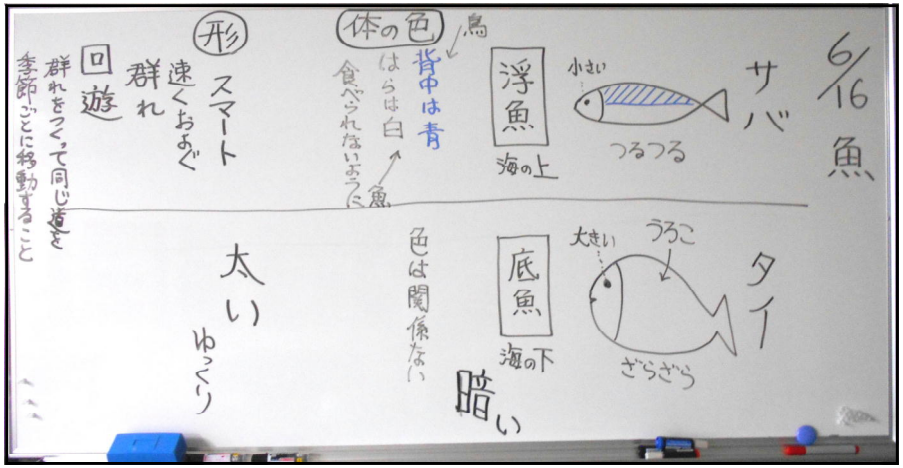
授業の感想6月16日 浮魚・底魚①「実物・体験」





対比による板書は、全体像を捉えやすくします。

５年生になると実際に足を運ぶ、赴いて学ぶといったことが難しいというのは既に授業で学びました。それを逆手にとって教室の中で実物を見せ、手で触ったりさせることで五感を伴う授業ができるというのが逆転の発想だと思いました。魚は食材としても馴染みがあるので**授業で実際に違いを学んだことによって家庭生活で少なからず自然と目を向けるようになり**ますし、実物を見ることによって**その場で分かり**知識に自信のない子どもでも発言できるといった知識のハンデがなくなるのがメリットだと思いました。

あと、発言の正しさよりも自分の言葉に自信を持たせて皆の前で発言する力をのばす方法として**間違った気付きを間違いととらえるのではなく、「考えの出発」にする**ことで、間違った子どもだけでなく、その子の周りの子どもの理解が深まるということも学びました。

教室と家庭、授業と生活をつなげること、そうすることによって、学びは広がり深まっていきます。「学習の生活化」を通して、本当の意味での理解が伴っていきます。ある側面からの「知っている」ということと、やはりそうなっていたことに実物を通して気づいたときの多方面からの理解のやり直しは違います。

間違った気付き、そして、どうしてなのだろうという疑問を考えの出発にできれば、答えに行き着くまでの大切なステップになります。

私が小学生の時にサバとタイのちがいはやりませんでした。漁業については習った記憶はありますが、今回の授業を受けてみて、記憶に残りやすい方はあきらかに今回の授業だと感じました。実際に魚をさわってみるなどの**体験学習**をすることは、教科書を読んで先生の話を聞いてノートに書くことをする学習とは、**子どもにとって興味深さがちがう**と思います。通常の授業では視覚・聴覚を主に使いますが、体験をすることは**五感で感じることができる**と思うので、今回のような授業は多く取り入れるべきだと考えました。

また、漁業を習う事前授業として魚について学ぶことは、漁業の内容がより頭に入ってきやすいと感じました。「あの魚は、こうだから、〇〇づりだ」などと**関連して答えが出せる**ので、この魚は〇〇づりと覚えなくても答えを導き出せると思いました。

体験学習を取り入れると、五感（目で、耳で、鼻で、舌で、皮膚）で感じることができます。その子らしさの気付きが生まれ、自分の意見が生まれます。

関連して答えを導き出せたとき　＝　知識の繋がりが感じられたとき

知識の使い方が分かり、学ぶことの意味と楽しさが分かります。

今回の授業でが、第５学年の単元を５年生の気持ちになって授業をうけました。５・６年生になると地域教材として実際に体験を通して学ぶということが難しくなっていく内容なので、どういう風に子どもたちの興味・関心を引くような授業をするのかとても楽しみでした。

授業内容としては、わたしたちの生活と水産業という単元で、魚のサバとタイを先生が持ってきてくれて、目で見て、触って、魚のつくりはどうなっているのかを学びました。２つの魚を触った後、生徒たちに２つの魚の特徴を書かせていました。生徒全員他の人達とは違う特徴を発表していて、魚を触るという体験をしただけで、**こんなにも生徒一人一人の感じたことというのは違うのだ**と驚きました。これが、魚の写真だけの授業なら、生徒たちは、こんなにも自分の意見は言えなかっただろうと感じました。

どれだけ授業で**体験を通して学ぶことが生徒にとっての学びになるのか**を知ることができました。また、板書は国語の授業のように縦書きで展開されており、全部の質問と生徒が発表したことが書かれていて、ぱっと見で、内容を理解しやすいような板書だと思いました。そして、授業というのは、最後にまとめが必ずあるものだと思っていたので、まとめのない授業のやり方を学ぶことができました。

子どもの気付きというのは、本来、とても多様です。そもそも、生活体験がそれぞれ違うのですから。

それを、「ことば」でまとめたがる、まとめて終えたくなることが教える側にあります。もっとゆっくり、もっとじっくり個々の「ことば」を導きだし、紡いでいかなければなりません。教師が、実感のないことばでまとめると、子どもは、自分のことばを発しません。まとめのことばを待つだけです。

本時のまとめをして終わるのと、
疑問を導き出して、次の授業の導入のように位置づけていくのと、
授業のやり方は、様々あります。
疑問は、理解を導き出すために。
理解は、次の疑問を導き出すために。
絶えず、次に関連づけられるように、前の学びを引用できるように、
そうなったら、学ぶことは、どんどん広がっていきます。

実物の教材を使う授業は、子どもたちに興味・関心を持たせるのに一番効果的だと思った。

この活動は、生臭いと感じる嗅覚、形や色を確かめる視覚、触れてざらざら、つるつるを知る触覚をフルに使って記憶に残りやすいと感じた。外に出て体験するといった活動ができなくなってくる高学年で、社会科は座学で「つまらない」という印象をなくすことができる。

体験的活動は、子どもたちにとっても、教師にとっても、保護者にとってもメリットがある。

子どもたちにとっては、魚の特徴から生態を想像でき、楽しみながら学習できる。また、保護者にさばいてもらうと保護者ってすごいなと感じることができる。教師も学習を定着させやすい。

教科書で「こうなんだよ」と説明するよりも、**自分達で理解する方が良い。「こうなんだ！」と発見が大切なのだ。**次の授業を進めるときも「この前は、こうだったよね？」を思い出しやすい。

経験していくことによって、深く考えることができる。

興味を持たせる授業としてとても良い方法だと思った。

体験を意味あるものにしていくのが教師の役目です。
いつ、どこで、何と、どのように出会わせるかが大切です。
そして、「こうなんだ！」という発見が大切です。
学習は、説明を聞いて理解するよりも、自分達で理解する方が良い。
そうそう、でも！
自分達で理解できる力を身に付けさせるために学習をしているとしたら。
理解は、目的か。方法か。考えさせられます！

とてもインパクトのある授業だと思います。ふだん社会科にニガテ意識をもつ児童も、とても大きな興味・関心をもってとりくめるのではないかなと思いました。

指導案もとても興味ぶかいです。４５分間で学べる適度な情報量と、児童の学習スピードに合わせた授業進度で、とてもすばらしいと思いました。大学生の私自身、タイとサバについての基礎知識を知らなかったので、さらに生魚について馴染みのない児童たちは、**目を輝かせて**授業に参加できると思います。

また、**国語辞典は、どの教科・科目でも机に置いておく**といいこと。疑問に思った語句は、あとまわしにせず、そくざに調べて知識をたくわえることが後々につながるのだと感動しました。

そして、生徒がまちがった意見を言っても、黒板にかくこと。ヘタに否定せずに、**いかにして児童に自主的に調べさせることが重要なのか**が分かりました。

目を輝かせる子どもの顔を思い浮かべながら授業を構成します。言葉を越える輝きを見られる教師は幸せです。

国語辞典は、いつでも、どこでも、自由に行えるようにさせます。国語の時間だけでなく、社会の時間だけでなく……鉛筆や消しゴムのように！

授業の感想6月16日 浮魚・底魚②「実物・体験」

「浮魚と底魚は、どう違うでしょう」
　この授業は、受けていても楽しく、興味を持って授業に参加できた。実際に魚を見て触ることにより、普段料理として調理された魚を見ていたのでは気付けなかったことを発見できる。
　そして、みんな同じ物を見ていることにより、みんな同じことを発見し、疑問などを持つことができる。それにより、いつも発言できない子たちも、情報をみんなと共に得るため、自信を持って発言することができると聞いて、なるほどなと思った。
　板書の仕方について、よく対比して書く先生はいた。今思えば、たしかに見やすかったし、比較しやすかった。このように考えて板書してくれていたのだと気付けた。今回の板書は、ほとんど子どもたちの発言のみで完成されていた。これは、**実際に観察したからできたこと**だと思う。子どもたちの**目で見て考えさせること**がいかに大切か分かった。

　板書の仕方で授業はかわります。板書するのは、
○「今」: 何が話題となっているのかが分かるように
○「前」: 授業の経緯を振り返られるように
◎「メタ認知」: 最後に授業を全体で捉えられるように
　板書を写しながら、そこに「個人の意見やはてな？」が書かれるようになったら最高です。正確にコピーするのではなく、そんな「自分の学び」が表れるようなノートを見つけたら、大きくカラーでコピーして教室に掲示します。そして、クラス全体に広げていきます。

　私は、小学校の授業で生ものをあつかった授業を聞いたことがありませんでした。しかも、先生だけでなく、子ども達も**魚にさわり**、私達もとても楽しく聞くことができました。魚について今まで考えたことがあまりなく、泳ぎ方やどこで泳ぐか違うだけで、体の大きさや太さが全然違い、20歳になって改めて知ることができました。
　また、板書をするときに、黒板を横に真ん中の線を引き、上と下に書くというものでした。私は、社会の時に横線を引いて板書をしているのを見たことありません。**比較**をする今回の授業では、とてもわかりやすい板書でした。子どもたちにとって、机に向かって長い時間ノートを写すという動作は大変だと思います。しかし、今回の授業では理科の授業のようにグループで魚をさわり、目の前で魚をさばくというのは、とても**インパクト**が強く、あまり見る機会がないので、とてもいい経験になると思います。また、**自分の目で見ること**によって、テレビ映画よりも記憶に焼きつくと思います。

　実物の与える影響は大きいです。
　教師のどんな詳しい説明も、実物には負けます。
　ただ、同じように提示しても、実物から学ぶという経験が少ない場合は、感じ方が弱く、すぐに「ことば」で表面的にまとめてしまいます。そして、分かった気になります。分かるとはそういうことだと学んで（学ばされて）きているからです。
　実物からじっくり学ぶ体験を、低学年の生活科や、中学年の社会科でさせておかないと、
　自分達で理解する方が良い。「こうなんだ！」と発見が大切なのだ。
　こうした発見に繋がりません。

　子どもに**実感を伴った理解**をさせるためには、良い教材だと思いました。魚は、ほとんどあの形でスーパーで売っていることがないので、視覚、触覚、嗅覚で感じとれると思います。
　知らなかったことも、覚えることも自然に頭の中に入っていくと思います。**つながりを考える力を身につけて、様々なことに因果関係があると気づいてもらいたいと思います。**
　本当の答えは教えず、**考えさせて、次の授業へつなげる技術**が難しいと感じました。
　全ての学年、全体通しての授業の流れをつかんで、つながりを大切に学ばせていくのが社会に重要なことだと感じました。

　つなげる・つながり、という視点で考えていますが、すばらしいです。
　単純な知識の「量」の比較ではなく、
　因果関係というつながりから捉える「質」の比較
　そうした子どもの学び方・見方は、
　おそらく、教師の授業観（この場合は、教材観かな）から生まれているものだと思います。
　特別な力を持った子は別でしょうが、おそらくそうした教師・保護者のもとでしか育たないものだと思います。

私達の生活の中で水産物というのは、重要な物だと思いました。今回は、私達が子ども達の目線になってやったので、水産業について学び、理解することができましたが、実際に子ども達に教える場合、教える内容が多く、学習することは難しいのではないかと感じました。普段の生活の中で水産業に対する子ども達の経験や知識は少ないですが、授業の中でやることにより、子ども達に新しい知識を身に付けさせ、**発見**の多い分野だと思うので、興味を持たせるのではないかと思いました。また、今回、子どもの目線になって受けてみて、**視点を絞っていたので**子ども達にとってとらえやすいと思いました。それに、実物を使いながら教えていたので、多くの疑問を持たせ、考えさせる幅が広がるなと感じましたし、子ども達が家庭に帰ってからも、日常生活での水産業について、楽しく、疑問の多くを導き出せるのではないかと思いました。

視点を絞っていたので……体の色、形、身の色、そして、とり方
その全てが対比になっています。…… 子ども達にとってとらえやすい
こうした視点をもって、サバとタイを比べました。
比べることによって、それぞれの特徴が見えてきます。
国語の登場人物の比較
算数の解き方の違い
理科の実験方法の違い　　……　多くの場面で使われています。
この教材で教えるためには、視点をどこに絞って、何と何を比べて考えさせるか、教師の重要なポイントです。

授業をしているときに、教室に魚がいるという光景が新鮮だった。私達と同様、子どもたちも**普段の授業よりワクワクする**と思った。
特徴を探すためには、一人一人が**さわろう**としなければならないので、皆積極的になっていた。
今回の授業では、発問に対しての答えをズバリ知っている人がいてスムーズに進んだが、本当の授業では、それをうまく誘導しなければならないと思った。

ワクワク感は、実物・実体験のすごさです。
教師がどんなにていねいに教えても、学ばせても、できないことを「実物」は果たしてくれます。
そうした機会を与えることは、教師の「教える」という役割の大切な部分だと思います。

山の方に住んでいる人に海の方のことを教える時の教材として、スーパーで買うとか、クラスの保護者にたのむ等で魚を用意するのがすごいと思いました。私の地域は内陸でしたが、そういうことはいっさいせずに、教科書のみの教材だったので、こういうのを用いた授業をしていきたいなと思いました。沿岸に住んでいる人は、その理論だと川魚や山菜を用いるのが良いのかなと思いました。
でも、これが何の授業なのかという**目的をきっちり**してやらないと、生徒がとまどってしまうと思いました。
魚を教材とすると、かいぼうや魚のとくせいを授業で扱うなら理科の方になってしまうだろうし、採り方になると社会になってしまうと思うので、理科の時間に魚についてこと細かに分析して、生物の勉強をし、漁業については社会の時間にやるのがいいのかなと考えました。

「目的をきっちり」：大切なことです。
教師は、何を目的にしてこの授業を行っているのか。
それを明確に示す物が、指導案です。

実物は、多くのことを含んでいます。
それを、社会科で見るか、理科で見るか……見方によって違ってきます。
教える側は、これを意識してしまいますが、子どもの学びは、必ずしもそうはなりません。

１つの実物を教科で分けて輪切りにしてしてしまう。
だから、
その物を総合的に（教科で分けずに）見ようとする学びが育たない。
だから、
総合的な学習の時間ができました。
前に講義で登場した「分離教科カリキュラム」と「経験中心カリキュラム」の違いになりますね。